

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04123

研究課題名(和文) 苦難の体験からの解放に関する社会学研究～総合的パースペクティブから

研究課題名(英文) Sociological research on liberation from the experience of hardship-From a comprehensive perspective

研究代表者

藤澤 三佳 (FUJISAWA, Mika)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：00259425

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：人々の苦難の体験に関して、分野横断的に総合的観点から調査研究をおこなうことが目的であったため、「非行やひきこもり問題」の調査研究、さらに言語にならない苦しい気持ちの表現活動を、精神科病院外来の絵画を中心とした作業療法科をフィールドとして調査研究をおこなった。苦難の体験を抱えるようになった原因を、主に質的調査と参与観察により明らかにし、そこからの解放の手段として、言語・非言語的表現を扱って総合的観点から考察をおこなった。他者の状況を共感して受け止めるという自助グループ活動、表現活動による共感や居場所をもつことが、苦難の体験からの解放につながる効果のある大きな方法であるという結果を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義として、苦難の体験をもつ人々に関する調査研究は、プライバシーに大きく関わり非常にむづかしい為、先行研究が少ないなかで、その問題やそこからの解放を探究することは大きな社会的意義がある。加えて、本研究は、苦難の体験に関して言語的に語ることに加えて、言語的意味づけすら困難な極めて深刻な問題状況においてみられるような非言語的表現も含んでいる。それは、福祉・心理・精神医学と芸術学の交差領域に存在している学際的研究の特徴をもち、社会学的研究として先行研究が少なく、必要性が高い分野を開拓するという学術的意義をもつ。

研究成果の概要(英文)：To clarify the subjective meaning of people's experiences of hardship from a comprehensive perspective, we conducted a research study on the "delinquency and hikikomori problem". In addition, I conducted a research study on how to express feelings that do not become verbal and how to be healed by doing so, using the department of outpatient occupational art therapy of a psychiatric hospital as a field. The cause of these problems is clarified mainly by qualitative research and participant observation, and the self-help group activity of sympathizing and accepting the situation of others by verbal and non-verbal expression is why it is possible to release from the experience of suffering. I showed the result whether it is a big method with the connection effect.

研究分野：社会学

キーワード：精神障害の患者 精神科病院の患者 芸術療法 作業療法 非行 自助グループ アートによる表現居場所

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初の背景として、1980年代から、不登校、ひきこもり、非行、患者、精神症状、いじめの被害等、苦難の体験を抱える人々に関して多様な自助グループと関わりながら研究をおこなってきたが、各分野において関連する社会的機関等も異なることから、従来、分断されて研究されてきた傾向がみられた。そこで、分野横断的な研究によって、従来分離されてきた人々の「苦難の体験」の共通的な性格を明らかにすることを着想した。

(2) また、同時に苦難の体験を、社会的コミュニティやセルフヘルプグループ等において他者へ語ることは大きな意味をもつが、問題が当事者にとって非常に深刻な状況においては、その言語化すら困難であることが多いことも調査のなかで経験してきた。このことから、言語的表現のみならず、言語以外のさまざまな表現を含めて研究をおこないたいと考えてきた経緯がある。

この点に関する社会的状況や社会学以外の他分野の研究状況に関する背景として、芸術や福祉の分野では、2000年頃からDVの被害者、非行や犯罪者の更生、また知的障害や精神障害、発達障害の人々の表現活動を支援し、その活動や作品を広く一般に提示する社会的ムーブメントがおこってきている。

海外では、こうした多様な表現に関する社会学的研究は、最近の質的研究の将来的展望として注目をあび、M.M. ガーゲンと、K.J. ガーゲン(2000)は、質的研究には、芸術プロジェクトやパフォーマンスも含む研究コミュニティの拡大の必要性を、E. ストリンガー(2007)もアクション・リサーチのなかでの質的調査における詩や歌、ダンス、美術、マルチメディアといったコミュニケーションを、また、ボードレットとエスタブレット(2006)も、1970年代半ばより先進国では、若者層の自殺率が高まり、その抑止のために、自己実現、社会的な絆の創出、個人的満足が必要であることを、アートによる自己表現を含めた「創造的個人主義」という概念を用いながら指摘している学術的背景が研究当初存在していた。

2. 研究の目的

(1) 本研究目的の1点目として、上記(1)の背景と対応して、児童虐待、DVによる被害、障害、疾病、貧困、社会的排除等、さまざまな問題を抱えた人々が、その苦難の体験をどのように意味づけ、また社会における他者との関わりをなかでその状況から解放されていく過程を、「苦難の体験」という観点から、臨床分野における横断的な質的調査によって明らかにしながら考察することであった。

(2) 本研究目的の2点目として、上記(2)の背景と対応して、従来の研究では、ことばでの意味づけや言語的表現がデータとして用いられるが、人々が苦難の体験をもった場合、しばしばそのことすら困難な場合が多く存在していることから、言語以外のさまざまな表現も含めて総合的な研究をおこなうことであった。

3. 研究の方法

(1) 上記の目的(1)に対して、従来、分離されていた児童虐待、いじめ、DVによる被害、ひきこもり、非行、障害、疾病、貧困、社会的排除等の分野横断的な調査をおこない、「苦難の体験」を中心に、各々を比較することや共通した視覚から研究をおこなった。具体的には、分野横断的に自助グループや当事者集団、医療クリニックや支援組織を中心に質的調査をおこなう方法をとり、特にさまざまな会のなかでも、不登校、ひきこもり、非行を中心に、当事者の会や親の会(不登校全国大会、非行とむきあう親の会全国大会、「非行を考える親の会」)を中心に参与観察をおこなった。また近年問題となっているひきこもりの50-80問題(子供が50代、親が80代)も調査対象にして、「市民の会エスポワール」を当事者や支援者と共に立ち上げて参与観察をおこなった。('8050問題・考える』『笑いと共に生きたい』山田孝明編、28~40頁、2018年)

(2) 上記の(2)の目的、すなわち言語以外の表現を含めた総合的な研究をおこなう目的に対して、公的、及び民間団体やNPOが主体となり、さまざまな表現を展示する場の調査をおこなう方法をとった。特に、地域文化と福祉に寄与することをめざす表現活動として、京都市で活動するNPO法人障害者芸術推進研究機構の調査(主に知的障害者の活動が中心)、宮城県大川郡にあるA特定非営利活動法人(主に精神障害者の活動が中心)のB美術館、就労継続B型の活動について、さおり織り、絵画、詩の活動に関して調査をおこない、同上美術館における強迫神経症を抱える精神科通院患者の絵画展に対して、地域に人々がどのように関わっているのか、また表現者当事者との関わりに関して研究をおこなった。

また精神科病院関連では、最も古い歴史をもつ精神科病院の一つであり、東大教授呉秀三が精神科病院改革を実行した都立松沢病院の患者の創作物調査、芸術療法の国内の創始者である中

川保孝が創設した精神科病院である嬉野病院付設「アートセラピー美術館」、同じく創始者の一人である安彦講平主催者の造形教室調査（東京足立病院、平川病院）、展覧会調査（東京都精神科病院主催公募展「心のアート展」、平川病院主催「癒しとしての自己表現展」等を中心として）をおこなう方法をとった。これらの病院のなかで、患者は苦難の体験をどのように表現していたか、支援者や他者とのコミュニケーションをどのようにもっていたのかを中心に調査をおこなった。

4. 研究成果

(1) 苦難の体験をどのようにもつにいたるのかという人間の経年的プロセスの解明が研究成果の1点目としてあげられる。

人々の生活史初期に長時間を過ごす家族や学校の問題を中心に、児童虐待、いじめ、ひきこもり、非行、発達障害、貧困等の問題に関して、多様な当事者の会や親の会を中心に、各々を比較し、また共通した視覚から横断的に調査をおこない、特に青少年のひきこもり現象（ひきこもりの全国組織「オレンジの会」と非行（「非行に悩む親の会」の全国組織）を中心に調査をおこない、それらの調査結果を、「非行」の親の会の自助グループ機能と参加者の変化」（第70回関西社会学会）「社会臨床の意義」（第27回日本社会臨床学会）において学会報告をおこなった。若者の生きづらさや苦難の体験と、学校と家族の関係が重層的に作用していることを実証的に明らかにした。

(2) 研究成果の2点目として、上記の苦難の体験からの解放に関して、分野横断的に比較的視座から実証的に明らかにしたことである。

従来の研究法であると、貧困やいじめ、虐待、発達障害、薬物や処方薬の依存等の問題が複雑に関係しているにもかかわらず、例えば、ひきこもり系は、臨床心理、精神医学、教育関係者、非行系は、法関係者（例えば家裁の調査官、弁護士、保護司、少年院他）精神症状は医学というように、関係機関が分かれていることから、それぞれの領域の共通点が把握しにくかった。また時期的に多様な問題を併せ持つ人々、非行だけがひきこもっている時期がある人、摂食障害、自傷行為がある人たちも存在しており分野横断的に考察する必要性を示した。

親の会に関しても、ひきこもりの子をもつ親の会と非行に悩む親の会は、関係機関が分かれているが、学校や家族に関連する苦難の体験に関して共通した性格がみられたことを明らかにした。しかし共通点はありながらも、非行に悩む親の会の方が、社会的認知度や社会からの援助も少なく、親が鬱病発症や自殺に追い込まれる人も多いことを示し、比較調査のなかで、当事者や親等がその苦難の体験をどのように意味づけ、また社会における他者との関わりのなかでその状況から解放されていく過程を、日本臨床社会学会の学会誌『社会臨床研究』に研究論文「非行の親の会の自助グループ機能について」として示した。

語り合い、他者の状況を共感して受け止めるという自助グループ活動が、なぜ苦難の体験からの解放につながる効果のある大きな方法であるかということ論じ、苦難の体験を生む社会的要因を考察し、同じくそこからの解放及び、「社会再構築」に関する研究をおこない、そしてその結果を『社会再構築の挑戦』（共著、ミネルヴァ書房）において示した。

(3) 研究成果の3点目として、上記の苦難の体験からの解放に関して、非言語的表現の研究を含めた社会的解明により、臨床分野の臨床芸術社会学の理論的、実践的役割を提示した。

苦難の生活史のなかで、さまざまな精神症状をもつにいたった患者に関して、他者と交流をおこなう際に、言語以外の表現媒体を用いている人々に注目して、どのような表現をおこなって苦難から解放されるという自己変化をとげているか、その表現をおこなう環境の「居場所性」を中心に、日本社会学会における「アートベースリサーチの可能性と実践部門」において学会報告「精神科通院患者の造形活動における自己表現と他者との関わり」をおこない、それを元にして、論文「精神科病院の造形教室において表現すること～自由な表現、表現の変化、教室の「居場所性」を中心に」の執筆をおこなった。苦難の体験をもつ当事者が、「患者自身のことば」を他者と共有し、また言語だけではなく言語以外の表現も含めることで再び、剥奪された社会的なものを取り戻していることを明らかにした。芸術療法や治療による枠組みとは異なり、当事者の自由な表現と他者との関係が、苦難の体験からの解放につながることを示した。

(4) 研究成果の4点目として、本研究のテーマは臨床心理学分野及び精神療法分野、芸術学との境界領域に存在しているため、他分野との交流をおこない、またこのような学際的な研究の意義を、国際的な比較の観点からも示した点である。

臨床心理学分野に関しては、家族から児童虐待を受けた生育史をもつ人々が、身近で親しむべき家族から虐待を受けるという精神的に受け入れがたい虐待体験を表現することで、どのように自己の変化をもたらしているか、作品にはそれがいかなる過程を経て表現されているのかを中心に、調査結果内容を、第52回日本臨床心理学会にて「苦しさを描くことによる自己の変化」という題で学会報告をおこなった。また、作品分析の観点からの苦難の体験からの解放のプロセスを主とした研究をおこない、多くの絵画作品の分析をおこない、日本描画テスト・描画療法学会の学会誌『臨床描画研究』31号に「生」をよみがえらせる描画」という執筆をおこなった。

同学会において学会報告として「A 病院外来作業療 法科における絵画表現による自己の変化」をおこない、絵画表現の変化と自己快復の変化の考察をおこなった。

そして、「精神科病院の患者のアートによる自己表現」という題で、韓国、アメリカの研究者と共に、国際研究集会「越境体験：境界を揺さぶる アート(於：成城大学)」において招待講演をおこなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 藤澤三佳	4. 巻 26
2. 論文標題 非行の親の会における自助グループ機能について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会臨床雑誌	6. 最初と最後の頁 14-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤澤三佳	4. 巻 25
2. 論文標題 精神科病院の造形教室において表現すること～自由な表現、表現の変化、教室の「居場所性」を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会臨床雑誌	6. 最初と最後の頁 40-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤澤三佳	4. 巻 31
2. 論文標題 「生」をよみがえらせる描画	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 臨床描画研究	6. 最初と最後の頁 5-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 藤澤三佳
2. 発表標題 「非行」の親の会の自助グループ機能と参加者の変化
3. 学会等名 第70回関西社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤澤三佳
2. 発表標題 社会臨床の意義
3. 学会等名 第27回日本社会臨床学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤澤三佳
2. 発表標題 精神科病院造形教室において表現すること
3. 学会等名 第28回日本社会学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤澤三佳
2. 発表標題 A病院外来作業療法科における絵画表現による自己の変化
3. 学会等名 第16回描画テスト・描画療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤澤三佳
2. 発表標題 精神科通院患者の造形活動における自己表現と他者との関わり
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤澤三佳
2. 発表標題 精神科病院のアートによる自己表現
3. 学会等名 国際研究集会「越境体験：境界を揺さぶるアート」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤澤三佳
2. 発表標題 苦しさを描くことによる自己の変化
3. 学会等名 第52回 日本臨床心理学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 谷富夫、稲月正、藤澤三佳、西田芳正、西村雄郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 451
3. 書名 社会再構築の挑戦	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>藤澤三佳「8050問題・考える」『笑いと共に生きたい』山田孝明編、28～40頁、2018年、イシス出版</p> <p>藤澤三佳「生きる喜びを生む自己表現」『ネットワーク355号』東京ボランティア市民活動センター、13～16頁、2018年8月号</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----